

Interview03 共につながる

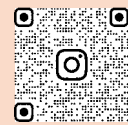
裂き織りが紡ぐ 新たな絆

「トントン」とリズムよく響く機織りの音。あすなろの皆さんが作っているのは裂き織りです。今秋、地域で生まれたつながりによって新たなコースターが誕生しました。コースターをデザインした新垣さん夫婦から裂き織りとの出会いを、製作したあすなろの皆さんの姿や思いを所長の百瀬さんから聞きました。

▲コラボレーションしたコースター



tumugi shop
Instagram



安 曇野の景色に引かれ、本年3月に東京から移住しました。7月には2人で手掛けるファッションブランドの店「tumugi shop」をオープン。地域ならではの素材を生かした商品を作りたいと考えていたところ、偶然訪れた市内の美術館で売られていた「あすなろ」の皆さんが織った裂き織りに出会いました。色の濃淡や糸の太さの違いによって生まれる風合いに魅了されると同時に、もっと多くの人に手に取ってもらえる可能性があると感じ、コラボレーションを打診しました。

コースターは表面に裂き織り、裏面に私たちが作る服から出た余布を使っています。実際に製作の様子を見学した時も、丁寧な作業に価値の高さを実感。純粋に取り組むからこそ生み出された裂き織りを大切に扱っていきます。

あ すなろは生活介護事業所として、主に知的障がいがある人の日中の活動をサポートしています。裂き織りは日中の活動の1つで、売り上げの一部は利用者の皆さんの工賃となります。不要になった布を染め直し、細く切って糸にしてから織り上げる裂き織り。根気のいる作業ですが、みんな納得したものができるまで機織りに向かいます。コースターに触れた人が裂き織りはもちろん、障がいのある人への支援に関心を持つきっかけとなればうれしいです。こうした地域との結び付きは利用者の皆さんのやりがいにもつながっています。



▲出店イベントで販売する様子

あすなろ
Instagram



安曇野福祉協会
生活介護事業所あすなろ
所長 百瀬 勇人さん(48)

Info 「こころ」にもユニバーサルデザインを

最初から誰でも利用しやすいように施設・製品・環境・社会の仕組みをデザインするユニバーサルデザイン。その中から、こころのユニバーサルデザインのポイントを紹介します。 関人権共生課 TEL 71-2406

ポイント①

さまざまな人の困りごとや行動面の特徴を知る

ポイント②

困った様子の人がいたら声をかけ、どのような助けが必要なのかを聞く

ポイント③

「ゆっくり」「わかりやすく」「ていねいに」、相手に合わせたサポートをする

人によって暮らしの中で感じる困りごとにも違いがあります。地域に関心を持ち、さまざまな人がいることを知ることは、こころのユニバーサルデザインにつながります。パンフレットとガイドブックは市HPでご覧いただけます。

市HP ▶



Interview02 共に歩む

自分らしく働き 光る日常

いつも前向きな原由香里さん。身体障がいと知的障がいがあり、歩いたり話したりすることはできませんが、日中は事業所で多くの人と関わって過ごしています。利用する事業所・夢の実の副理事長で由香里さんの父親の原孝雄さんに話を聞きました。



原 由香里さん(38)

NPO 法人夢の実
副理事長 原 孝雄さん(66)

障がいを受け入れた瞬間

夢

の実は、就労継続支援B型事業所と生活介護事業などを行う事業所です。私のような障がいのある子どもの親が中心となり平成20年に立ち上げました。

娘は脳性まひがあり、食事や着替えなど日常生活には周りの助けが必要です。開設当初から生活介護事業を利用していています。私は娘の障がい、いわば周りとの違いを受け入れるまでに時間がかかりました。障がいがあると分かったのは1歳の時。ですが本当に障がいを受け入れることができたのは、幼稚園の運動会で先生が娘も参加できる特別種目を用意してくれたことがきっかけです。それまでは障がいがあるのは娘だけで、周りの子どもたちとの違いに戸惑いが隠せませんでした。しかし、目の前で必死に頑張る姿を見て、気付けば家族と一緒に大きな声で応援していました。初めてたくさんの人の



① 今日のおかずは？と昼食をのぞく孝雄さん。由香里さんも笑顔に② 資源回収で回収したペットボトルを仕分けする③ 昼休みにパズルを楽しむ

自分らしい働きができる場所

前障がいを受け入れた瞬間でした。同時に、表向きは気丈にしていますが、本当は障がいを自分の中に落とし込めていなかったと気付いたのです。

人と関わることが好きな娘は、夢の実で自宅とは違う表情を見せてくれます。自宅ではやることに限られますし、関わる人も家族が中心になってしまします。本人にも家族にも、自宅以外の居場所が必要不可欠です。ここでは、利用者の皆さんができることを見つけて過ごします。例えば地域での資源回収とその仕分け作業は大切な仕事の1つです。そもそも「働く」ということは自分のためでもあり、人のために行うことでもあります。できることは限られるけれども働きたいと思っている人たちの居場所を作りたい。それが夢の実を立ち上げた時の原動力となりました。重い障がいがあってもその人なりの

Voice 誰もが自分の役割を実感できる環境を



サービス管理責任者
寺島 てるみさん

夢の実では、自分ができる仕事を共に見つけ、取り組めるようサポートしています。いかに楽しんで仕事ができるかということと、積極的に地域へ出ることを大切にしています。障がいがあっても地域で当たり前に暮らせるように、理解を広げていくのも職員の役目。ここに来れば自分の役割があると感じるような環境作りに努めています。

働き方は必ずあります。私も高齢になり、将来の不安は常にあります。娘の次の生活の場を見つめる時期にきていると感じています。そんな時に私を励まし助けてくれるのが娘の笑顔です。この先もうれしいことも困難なこともあると思いますが、共に歩みを進めていきたいです。

※ 日常生活で必要な介護と合わせて、日中の活動を支援して障がいのある人の生活の場を広げたり、働く場所を作ったりする障がい福祉サービス。